



子折菜
風



手折菊三

分手の吟

〇會者定龍乃世のあひひらさるゆあうしあきあけハ
 とらあひひらさるゆあうしあきあけハ
 人情のたうりさるゆあうしあきあけハ
 ナとあきあけハ先あきあけハ東武小極磨のおあきあけハ
 草さるゆあうしあきあけハの園をむらひて後あきあけハを
 待あきあけハあきあけハの秋あきあけハをあきあけハ
 之秋のあきあけハあきあけハあきあけハあきあけハあきあけハ
 備あきあけハあきあけハあきあけハあきあけハあきあけハ
 比あきあけハあきあけハあきあけハあきあけハあきあけハ
 とあきあけハあきあけハあきあけハあきあけハあきあけハ
 かあきあけハあきあけハあきあけハあきあけハあきあけハ
 皆園をいあきあけハあきあけハあきあけハあきあけハ

くもを妻より又事く懐く心なき様

たえ君
白雲時坊

△此巻より至りく冬四時年月
の序を空に存し歴路し玉と此
風文新編ありい出くやく
記く伝くぬ
あふく〜美濃の細竹主人たる再遊を
歌詠く傳ひて

何もかく〜海系祝乃海書し

は〜免ち山豊前豊後政の雅友不世香
初秋の比筑前不至り埜多福園乃連流
風文をまき手良おまき築修の月を懐く
思ひ出や千代の松系より此月

其後程あく秋もさうらうく不世香くこの
ころ肥の佐賀く移り其ころ相長修く行

送別

○初夏の比く〜あ修園より後ひて二百余り乃
起るをい〜このり秋をたまけに〜信をゆ〜

○長府ある一字、唐茶舎凡凡八百茶坊、のゆを
送るまゝ、亦朝暮園を、訪せりる、此地の茶色、
加つて、八四と、路の先と、り、ゆし、去年、八、
越、今、年の、茶、中、西、を、種、終、り、て、
茶、を、取、り、て、茶、水、の、切、を、種、人、の、た、
茶、を、取、り、て、茶、水、の、切、を、種、人、の、た、

上りくを晒し、不束て、雪乃山 朝暮園

思北身、め、志、む、ま、く、ら、ぬ、を、 茶舎

茶の比、ゆ、を、ま、く、ら、ぬ、別 茶舎

昔、ひ、ひ、人、蔭、身、あ、く、和、と、乃、の、種

清くむ、り、光、る、お、存、る、旅、人 朝暮園

亦、武、年、十、二、茶、ある、有、結、亭、小、深、林、し

茶、能、の、用、ま、く、ら、ぬ、茶、を、取、り、て、

心、後、や、馬、や、柳、い、ま、く、ら、ぬ、花、の、種

又、武、年、宇、治、の、里、ある、茶、葉、山、に、訪、く

山、の、を、出、身、六、日、本、に、茶、葉、を、

芳、野、山、遊、吟

花、を、さ、ら、る、ま、を、の、こ、ん、る、お、れ、ら、ぬ、も

さ、ら、る、ま、を、の、こ、ん、る、お、れ、ら、ぬ、も

あ、ら、る、ま、を、の、こ、ん、る、お、れ、ら、ぬ、も

あ、ら、る、ま、を、の、こ、ん、る、お、れ、ら、ぬ、も

其女少く一雲をて海を芽種るれ

け時初く二平一まの口をさこ傳るまぬ

夏もあとも花うさく見えて芽種る山

こみ種乃きまあうかふる志くあ

真の院と中を衣くこけ入とまらくの清水を

むさおおうう大雨り建ひ西行をる

一程をぬきふ雷鳴山動さるうらうら

山を下りまぬ夏の町ふ能も此志するはま

車をくゆる白かくうあふく種出しくあさころ

初先の深きとも玉つらぬこ水を接るて

六田乃うく柳の液とくあふまあう舟り

ふふ中伝きハ渡しち舟隻の代りふ

短冊あくはるあまをてり

舟人もやうく柳乃こはしとく

其とらま大和路りかうく龍田山の巻り

を初くうくさるる

案一初あ人もあ龍田哉

浪舞り了以院を体むるおうくけ地の人よ

誘ひき長良の流りを越す女をさし
 けあきりのをまき角く田叢の峰よりか
 うやま続く松蔭の大江の岸乃ちあか
 折かたれぬあを思ひかへてきん千代の松系
 の傍ふも似うよひて佳系あふんうさ
 あしりふを寺井何某あましりあけ
 さらぬくやあましくちあある人の籠せあ
 あしり種儂ぬを横笛を吹合を流し
 五くハるハ例の毎造他は松り枝の

けらるまきまを自在の釣金よ準ゆきハ
 万像の味もは中ふあましく舌打しくはあ
 岳をけ飾漂泊の身は詔計とらふく

金釣きハ高きましくし松の流

又

けらるまきまを自在の釣金よ準ゆきハ
 田叢のゆきよりあまふを流

芽せしりし神りふらみしを

風月入るの君空しき
 かしらけくちのぬき後吾妻下
 折う馬の錢不しく山水の画小清自
 種見あそく玉りりはきい

今多し詠もる人もあそ板立はし
 月のか笑のうねふかしくあそく
 こは山ありけり涼
 不破乃筭也

武幸と秋城の芽花運素多婦の行
 今を逐はぬ
 折うとるまことけをいさり
 かしらけくちのぬき

初穂のは月ひとる法依の園縁海うぬき
 花枝むう
 藤田氏の家婦古梅ぬ
 花枝むう
 花枝むう

或年石清水八幡宮に参りて
春を待たむ

男山を楯にけりてのま

又

男山神うきちうたせあま
去年より待てし春あはれり

河内のお長尾といふ村の福院より

去て西月く日始りて

山をさるや暁はあけ暮業の目

とて春を待つ人の梅深き花

立寄し昔のやに梅あはれも

かろくはあはれ梅あり下風

或年吾妻より参りて建坂山より

心持ふと思ひし雲北山清き水

もやのむらむらと涼しさ

前右府藤公より七絃琴の銘を
 流水と玉なり粒々清音を流らせ
 良水の音難き秋の身小案の伝らぬ
 おの九月の廿日とらうり不管絃を
 催さ琴給ひくやけくまをめぐ
 聴かせよとほおろく月めく清遠さ
 へく水を

けふもむらむらと涼しさ
 かへるもむらむらと涼しさ

吾妻より携りしやうり七絃琴を
 清銘をよめく漆工くまの宗哲將子
 の許きて強し初るおろく炉邊よのめく
 薰物よりとらうり

梅の香や先の世の初きる
 清くもあはれ高秋幾久き

漆敵

財満氏の鎮守人元明神乃清まらぬ琴を強て

その葉乃ち落しかけても七の結此
長茂去る魚をあをやれり奇

黄門琴仙公おは年入つばうらまひしや
又或時堀内先生と中村宗哲の子とき
山中氏の松館へむえり茶室へ諸君の
あはれり古又はうねりふれ會席も
くちくのりそ信望務士乃厚情より
ある一設し侍る人のありさをも破り
あはれり手撫ふあつ室の松

○つ字の意は雅なり東くちうる茶の志をわけて落し
彼ま竹村木のちをわりのちて

うち枝りし梅さ葉を流り過

漆畝

或年長傷み再遊し平野先生小華音
を形如詩の初平あひも好時りら花

余在長崎春日贈清人蔣某舟

高士相逢翰墨林春風携手杏花深幽談坐久論琴
譜始聽泱泱中土音

清人費晴湖贈余詩序併存于此

獨抱雲和遍九州仙風道骨傲王侯揮弦徽奏猗蘭操流水高山孰與儔

丙辰歲客遊崎陽聞長門有女子菊舍者善鼓七絃琴工於詩高尚其志獨携古琴周遊歷國遍訪名山勝概其胸懷曠達淡然無所營不以爵位屈其志不以財利動其心飄然世外如閑雲野鶴無定跡也古人云歸真反璞終身不辱在士君子猶難其人况于閨媛而能瀟洒若是古今所罕有

也茲以琴衣屬余書因題一詩并為之序以紀其勝事
茗溪 費晴湖題

崎陽五日觀競渡

曾聞此地楚風存五日龍船壓海門競渡爭來豪興遍千年屈子恨何論

了了身臨名勝亦海客競以舟

奉賀楚石老和尚轉住于東明山

高德真如月從來照化城即今瓊浦地餘彩仰東明

思るやりの世を今も法の月

余在長崎次琴山村井先生見寄韻時歸期

在近

名園自一失追隨回首風烟勞所思客裡平生驚歲
去天涯幾日恨秋移琴山書到歸鴻夕瓊水魂飛落
月時獨卧紗窓難就睡憶君幾度誦君詩

奉留別公極橋林先生

一志詩書學因君得細論即今臨別處何以報殊恩

留別瓊浦諸君

離群明日謝同盟為客年々遂此生更有秋風鴻雁
到歸裝添得白雲情

奉留別平野先生余始學華音於先生

夙昔從來愜素心彈奏琴譜誦華音歸鄉欲報賢師
德泰岳魏魏河水深

指を打つるは去年の菊月とては晴月迄
佐賀城未鳳館了宿まゝ日奴の難舎
附合百卷より余るをいし好士達乃親ふりく

秋風吹散千紅
人日の難逢

人日の難逢

波々修るまは葉草やま葉乃日

遊筑前函崎

落日長汀十里松
潮波嘯起信蒼龍
雲祠月窟神

如在云是函崎千古蹤

古葉く落く千代の松はし

余歸郷里後子魚越君見訪有詩和其韻

久別三秋思幾深
飄遊無恙去來心
今宵頼有知音

在月下吹塵操素琴

余自為未亡人東西漫遊既已二十餘年矣

茲歲之秋歸郷偶訪舅家聊賦此述思二首

二十年来忘累機
風雲誘處促單衣
還郷松菊東籬

遍綠髮為霜去不歸

幾年逃世片心微
孤錫歸來叩舊扉
愁殺荒涼深竹

色此君今獨立依依

くまろくまろくまろを思ふ昔此秋乃月

或年蘇峰あり聴雨糖士の別在樹亭小

春をむくく

海へむくふあやあやあやあやあや

後又此地の宗岡氏の別在静壽亭

宿元具

漢峰捧旭瑞光開雲似羽衣雪似梅孤客迎春相望

處坐疑身是在蓬萊静壽亭在羽衣野村

人日山田如用宗岡花茵二君見訪客居分

子美一聯得林字

同人人日此相尋何限春光滿苑林山館迎賓無別

物賜鳥頭鳥睨睨和彈琴

け次の年もおめく宗岡氏の蕉雨園

宿の夫婦の佳情ふくくくくくくくくくくくく

そそそそそそそそそそそそそそそそそそそそそそ

首途

客路天涯自在通浮雲流水思何窮東西南北無踪

跡日夜飄蓬只任風

切き凡中の雲より吹くくふ那

風を

恭上 琴仙公閣下

一自抱琴辭閣宮隨身幾日遠遊中扶桑六十州山
水寫得清音興不窮

石山作

飄遊先到石山秋湖水漫漫浮月流一自美人弄影
管須磨赤石在雙眸
おもひけや六十帖乃秋恋月

留別千丈和尚

草鞋藜杖冷蘿裳鴻雁行行落野塘收取白雲明月
色江湖万里入詩囊
翁物の秋をおとめて臥陀の山

菟道十五夜

菟道長橋橫碧江加峯鳩嶺望雙雙誰知千里月明
夜耽賞山鐘聞曉撞

出きく風旭の山了りく乃月

杜若画題

燕子花開凝艷妖王孫去後想風標唯留五字旅衣
什千歲依然古八橋

歳世さめぬやうに此の世や燕子花

還郷新年作

萬戸鷄鳴曙色開乾坤偏喜歳華回高堂戲看玳瑁
服共上南山壽一杯

老の至りし盃をくち福壽草

○余實父了左君詩歌併存乎此

臣了左頓首百拜十年ハ

吾家三兩種相携君王前不塞南山色貢茲壽萬年

くろく代の末を譲りて子孫の

栄くも君乃とんひおれんむ

又

植る山くさくさる庭の娘小ま川

君もろくもく代や強ん

右享和二年正月九日子実父君の

長府侯了左殿あり

或年伊勢の吟松娘と伴ひ芳野山より
再移り花折るけ山よりさうさう寸舊交乃
先生よりカクンニ

花の介りある人もあり芳野山

を冥くるさうさうさう満屏やう帰杖し

長峯よりさうさうさうのさうさうをんあうて

雲よりさうさう芳野のさう此晨う那

さうさうより泊瀬さうさうさう吟松娘と

伴ひさうさう彼ぬさうさう伊勢路のさうさう

都のさうさうさうさうさうさうさうさう

さうさうさうさうさうさうさうさうさう

さうさうさうさうさうさうさうさうさう

甲子仲春藤井君陪候駕東觀留詩見別因

次韻奉送

江上依依楊柳風驪駒歌發別愁中驛亭五十春將

暮行入都門踏落紅

遊數珠濱

春風曳杖海南濱潮去潮來彩石新采々珠璣堪滿
掬笑他鮫室水居人

了みりけとてしつ陽空や数珠う濱
かけそや藤紫乃と那のあみ

長府侯前田別業二十勝

巖然亭在梅岡江濱小亭免る二十勝ハ我
長府侯幸山法代とるま定免るこまひて
正後代ハ孔 君侯移し以めてすをむひるる
小松詩翁のゆ藻多くしと強きぬ史の
海山うけと脚を交りいそんうさあし
おしも長月末の比文流多き人ときり
爰の情景をうき傳りぬ流子ハ詩中此風
姿を画すあま畫中の風情を暢小和分の

浦中も志ある波の玉落も初るふ屋より
 鄙言漢字のちちもあく杜撰の言りて書
 中くぬるもかおあく吉野能回りて那
 孫系をくくやまきくまやと四季混雜の時借
 をもく一景くよ即賢く後北第ひを
 求免作りぬ享和癸亥秋夢舎歌

關路行人

一雨洗風塵千山秋色新
 関門今不鎖驛下幾行人
 月一花ふるさぬ算の往來りか

入江松原

鬱松林外江流一帶長
 微風吹不動千載影蒼君々
 守るうよまき海入江の松乃以後

櫻尾夕陽

山櫻知幾樹艶々媚芳春
 自是東方賞堪誇異域人
 水より夕をつあま尾上乃様うん

洲崎細流

江流如曳練宛轉撲花清
 春暖滄浪水何人唱濯纓
 落しあや洲崎子津ふ細流を

壇浦翠巖

潮水無今古翠巖舊薜蘿
凄然雙淚落感慨不堪多
縮うけし露うけし
苔花

赤間急灘

白雪霏々夕赤間
急灘金波濺危石玉兔走雲端
初雪うけしあさう赤間急灘乃々

聖王衆曉鐘

滄海天將曙夙聞古寺鐘
蓬窓幽夢裡聖王衆儻相逢
暮やゆぬたや層々山のり鐘

硯海夜月

鈎簾臨硯海明月湧波濤
何用放生筆風情秋更高
風流の骨や硯乃海夜月

船嶋群鷗

舟去孤洲聚舟來兩岸分
舟船有未去鷗鳥不離群
船去孤洲聚舟來兩岸分
舟船有未去鷗鳥不離群

引嶋釣舟

葉舟依一島點々似相親
簑笠烟波上生涯付釣綸
以中ゆかり眠々さ誰花釣舟

柳浦幽烟

柳浦春風嫩翠烟遠且深扁舟堪繫纜不管別離心
愁ふころ後引や柳乃浦の志

山麿遠峰

遠望紫陽雪分明山麿峰天邊鍾秀色宛是玉芙蓉
云あむりや遠く筑此系の峯乃志

隼人瑞籬

海畔神祠古翼然映日暉蘋蘩長不絶千歲思依依
幣うあぬる瑞籬の千ころ久

足立高雲

隔海奇峰出夏天望更幽法雲連淨界引雨灑香樓
多ち伝ふや長立此と移ふ雪の字子

田浦村屋

秋風田浦晚戸々課農麻幾處高歌起是當蓬輦車
田の浦や細さかこころ 梶枕

舳崎數帆

晴望東南合帆々斷又連郷山看漸近多是鎮西船
船の帆や舳崎了了移く五月晴

興津白波

傳聞千載上干滿座雙珠波浪連天白驪龍窟有無
際之白と白し真津の蒼乃波

平津漁火

海門餘霽盡漁火照平津時聽櫓聲過得魚換酒人
漁火をく影や平津の星くさるる

厚東嶺松

指點厚東嶺蒼松戴雪高海風時一拂龍影濯波濤
冬々高し宿厚東乃峯の松

本山朝日

雲間春海靜初日上東山山影添花影共隨潮水流
歳世むふふや初日影

右二十勝

或年豊是後の玉別府とくするふよるを
所の温泉了了りぬ又と地乃人ふ誘られ
觀海山ふふを伝りぬけ山い別よりの
温泉五湯ある湯口くくくくくくくく

号々ぬ内々々甚清温の泉躍り出り不の
 人汲取り飯食を炊くも是を可也や
 風味甚妙あるも予も一椀を其一一む
 おろろ十月朔日あきハ峯のそとゆくり物
 打あて湧出る温地をそは自然の茶釜
 中あしそ品の茶客をさうくそは無殊
 了了浅くはそ吹風ききあをく雪の碗中ふ
 秘り香風碧雲の色濃くそい所謂流
 雲を吸うり似り即そ風情を画別く

詩心あきくもそ水々くそはそあ

天目く少事此雲の動きさう那

別府堀氏のみやどり日出乃登洲亭了
 秘りぬ此此夫婦の雅情了取もそそ地
 諸物友も金器くそは月返林をそあぬ

癸亥抄冬訪曇榮禪師

携琴此日上高臺白雪霏々復快哉更有紫陽山色
 好洋々雅興入絃来

世の介は志々々金さるるや手乃松

杖之後南冥先生遊柏水

偶介相携更高亭初水頭生松栖老鶴靜渚伴閑鷗

時試朱絃響更聞白雪謳追隨堪卒歲疑是到滄洲

結了叶ふるや初の浪此松

迎甲子之日於高田氏之家

石城霞水報陽春鼎煮寒泉茶味新自覺仙風生

兩腋何論身是異鄉人

大ゆくや中へ了又とりのを新

函崎春興

春風生紫海遠客獨從容 帝子降訖地本林然子載

松

心くく抱ふ子日や子代の松系ふ

博多客舎和答龜老君見贈 己見松永豊子 登所輯石城唱

和集

客舎迎春坐五更蕭々雨滴入琴聲賞音最是電夫

子遥寄新詩慰旅情

孟春再疊韻奉謝南冥先生見贈

七絃彈罷到天明
窻外曉鶯三四聲
一自陽春傳絕唱
西方日夕美人情

持了不_レ後々々々_レ引_レ今_レ柳_レ風

奉次曇榮禪師瑤韻

七絃傳得見東華
此日對君調更高
豈料洋峨千載趣
石城南畔和春濤

贈靈泉主翁

千里山陽客倚居
紫海西靈泉室是
通流水琴將提講
學同游夏避塵比
阮嵇春風三二月
桃李自成蹊

その意加ふ不_レ刺_レ踏も_レ古_レ梅乃_レ風

和_レ巨春戶次君見贈已見唱和集

梅花落盡雨陰_レ袖
浦烟波客自深
豈料高人投雪曲
坐教游子拂塵琴
春山春水何來色
江北江南不住心
千載堪思都督府
隨君欲問舊知音

言乃葉のそ_レ形_レや_レ々々々_レ和歌

石城客舎邂逅雲華師有詩見贈次高韻

酬

豊山開士本稱奇
逢著春風探勝時
如問別來相憶

切清風朗月香難期

學此等也予里了失下逢心

次韻謝荅西州師見贈

雷琴曾出自玉臣即是開元希世珍敢道唐音長不
斷七絃還屬布衣人

太宰府春雨中作用杜牧寄隱者之韻已見唱和集

花飛三月兩蕭々獨抱孤琴去國遥都府山河千歲
色能傳古曲幾人饒

奉謁菅公廟

物換星移俛仰間廟前水月影方閒獨思梅樹飛來
日遥向紫陽天拜山

太宰府聖廟見梅花

巍然聖廟紫洋隈二月花開一樹梅遺愛千年歌勿
剪東風吹雪使人哀

次韻酬松子登見贈時余將再遊南肥故及

千里相携古琴重來此地和高吟狂蹤衣恐流鶯
笑欲向南州問賞音

上巳日秋枝氏亭上作

蘭亭三日舊風流今見瑞芝園裡遊フコフ為是主人能愛レ
客自忘天地一蜉蝣

暮春寓太宰府訪古橫山禪室已見唱和集

橫山六蘭若白雲瑞影落テ藍川紫翠寒探勝テ有緣生隱ス
趣携琴每就石床彈ス

三月廿二日夜延壽王院見邀賜茶賦此奉

謝

管神祠外深川濱遊子重来此采蘋不意陪筵華館
兩青茶還賣去年春

於も流く花やあゝ後の池社あり

將赴南肥別榮公於古橫山已見唱和集

藍水橋邊縮柳枝肥雲南指再遊時君還試唱南薰
曲月裡清音誰復知ラニ

初夏到東肥訪高本李先生

破笠敞簑遠覓師山河跋涉喜相期携來流水琴中
趣長便交情無盡時上中下

あの花はくまゝふれしあ竹

遊琴山先生茶室有詩見示次韻

歸雲斂^ル處^ニ上^ニ高堂^ニ我^レ客^ニ開^テ簾^ヲ坐^シ洞房^ニ松下^ニ引^テ風^ヲ傳^フ古
 曲^ニ荷^ノ邊^ニ迎^テ月^ヲ納^ス新^ニ涼^ニ雪^ノ凝^リ碗^底濃^ニ茶^ノ色^ニ霞^ノ滿^リ杯^中碧
 酒^ノ香^ヲ豈^ニ料^ス今^ニ宵^ニ塵^外興^ニ井^ノ泉^共汲^テ潤^ス枯^レ腸^ヲ

琴山小隱

琴山^ニ綠^シ樹^ノ下^ニ爲^シ主^ト嘯^シ清^ニ風^ノ鳥^雀相^ニ親^ク久^シ柴^ノ門^ニ夕^ニ照^ル中
 落^シ葉^多々^々あ^らま^まと^思ふ^松竹^も

次^ニ子^ノ昂^ノ井^ノ君^ノ見^ル贈^テ高^ノ韻^ヲ

孤^ニ客^ニ彈^キ琴^ノ室^ニ白^ク雲^ノ翳^リ數^ニ峯^ノ黃^ク昏^ニ人^ノ去^テ後^ニ月^ノ下^ニ撫^リ哀^ク松^ヲ

之^の如^く之^の月^と知^るの^も多^し涼^し

奉^ニ送^テ安^東君^ノ歸^ル柳^ノ川^ニ

嗟^ス君^ノ爲^シ遠^ニ客^ト來^リ往^リ任^ス風^ノ雲^ノ柳^ノ水^ノ行^前漲^リ蘭^ノ臺^ニ去^テ後^ニ薰
 歎^シ求^ム黃^ノ鳥^ノ侶^ヲ還^シ使^テ白^ノ鷗^ノ群^ニ一^ヲ弄^シ名^ヲ琴^ノ罷^リ知^テ音^ヲ將^テ送^テ君^ヲ
 琴^ノ言^ヲ傳^フ言^ヲ傳^フ言^ヲ傳^フ言^ヲ傳^フ言^ヲ傳^フ言^ヲ傳^フ言^ヲ傳^フ言^ヲ傳^フ言^ヲ傳^フ言^ヲ傳^フ

梅^ノ雨^中奉^ニ寄^テ憶^シ紫^ノ溟^ノ先^ノ生^ノ

襟^ノ影^ニ陶^ノ霖^ノ雨^此相^ニ思^フ詩^ノ酒^何時^ニ重^ニ問^テ師^ノ新^ニ漲^漫々^ノ前^ノ澗^ノ
 水^ノ淺^深隔^ト揭^テ有^テ誰^ノ知^ク

お^のち^のあ^らま^まと^思ふ^松竹^も

奉和南冥先生送御座君南遊兼見憶之韻

御座君若德
山侯之丞臣

吹送南州客薰風一古琴園中暎桂月相照有清音

吹送南州客薰風一古琴園中暎桂月相照有清音

諸士吹雅管到小隱園喜而賦

風流高士各仙才龍笛鳳笙相和來疑是鈞天分廣

樂園中雲雨務即蓬萊

言多不... 風

酬訓導井君見寄

孤雲流水客來去自無心掬露嘗新草吹塵枕古琴

誰言稀友侶到處是知音况復山園夕泉聲添靜吟

琴山先生叢桂園所名十二景

岳林寺新樹

突兀岳林寺蒼然新樹圍薰風飄密葉積翠映斜暉

虛谷出鐘合深山群鳥飛人間難可到曳杖望依

尾茸棟... 蒼葉蔭

瓊華溪浣紗

西施促浣紗無處不瓊華似抱玄機石堪乘貫月槎

家途行客少路遠世塵賒滄浪歌何處還者集暮鴉
携々々々の子白——さし搗

發星山曉鐘

曉鐘雲外響望合發星山龕塔兩霜古危樓蒼翠環
六時多避暑一日皆偷閑驚破人間夢隨風落世寰
短松也似星山のあけ乃か杯

前溪漁市

日々朝未開前溪漁市連枯魚無膾具美酒盡囊錢
籃拂城中肆篝燃海上船暫時人去後散步獨蕭然

魚多川沼照——し行管う耶

蒼龍坂啖煨笋

誰道蒼龍坂蒼龍煨笋烟人歌淇澳頌客比晋時賢
宿雨新晴外輕風墜露前拔未供野膳玉版是參禪
竹の子乃名ふも味あり蒼龍坂

玄響堂彈琴

別有彈琴室名高玄響堂溪流聲自合山氣景如張
松籟添鐘鼓吟下鳳凰不求知己至萬物此中藏
あがく世の涼——をけ一る

平田彩虹綠秧

平田新水滿，彩映彩虹明。父老插秧返，兒童携鋤行。
猶存幽國俗，且憶歷山耕。村落期豐稔，聲々樂太平。
花紅多ふりも喜田の地よきうれ

月思亭待故人

江風吹起處，明月照高亭。待客未投轄，愛禽先發籠。
履痕憐露落，歌曲羨雲停。願與故人賞，涼筵醉不醒。
并ハヤ友ヲ待ツ花 簾

東山輕雷斷雨

輕雷何處響，斷雨霽東山。雲影掛青壁，泉聲澗碧流。
丈人抱壺走農父，荷鋤還却喜蒸煩去。清涼滿世寰，
白面や人のあはれも洗へあけ

綠陰避暑

綠陰堪避暑，樹接碧雲端。臨水開金簾，迎風弄玉盤。
披襟火熱盡，把扇夕陽寒。遠近無塵事，醒來坐覺寬。
夏々々々女世界々々新々々々笑々々々

漱玉溪浮瓜沈李

漱玉溪流水，能令夏景清。浪沈紅李靜，瀨泛綠瓜輕。

一片冰臺色半分寒室明雄風不待到頓覺無暑情
水清一色亦涼一冷一孔

鬼將軍廟觀燈

萬燈連廟下爭獻鬼將軍寶樹繞溪秀金繩界道分
功名殊域振靈德晉天聞千載星霜後威風今尚薰
燈の星を也照く影去し

始到川觀亭作二首

此夕知何夕清川思不違初來真自得新月相迎掃

西嶽浮雲客北山明月風孤琴一壺酒携到櫺櫺中
去又移る者へ傳ふ月涼し

避暑

江亭堪避暑綠水遶牆流從徑尋幽寂憑風任去留
披襟涼氣徹揮扇月光浮誰識西山客復乘北清舟
夏之くく見ふ月涼

余寓叢桂園木村君携耒雷樣琴云是吾家
藏之長物也而未嘗有試其音者汝試乎否
余喜輒奏南薰操其音甚清亮因賦

西園避暑坐松陰高士携来雷様琴弹奏再三不曾
倦開元遺響更清吟

い〜涼〜先〜試の郷多し

寄哭長瀬先生失妻

合歡花謝掩空房冷露無聲白水茫回首天涯秋色
落悲風蕭蕭殺斷君腸

あつ〜も〜さん〜少〜秋〜う〜く〜人の露多し

客舎偶成憶檜垣老女

為客白河上白河水自流渚靜鷗鳥或迎高士舟

抱瓶臨前岸白髮梳寒洲三輪有遺響千載思悠々
歸來拂緑綺音調促素秋故郷誰不樂常為萬里遊
耿燈照孤影月出轉新愁

去むや秋白川のあふ面影も

宇土城了りありと玉手帆足亭よまてふ

さ〜き〜秋玉山乃書をあまれりま〜

あ〜るのあや〜り〜ま〜り〜あ〜る〜れ〜

訪坂本君

雅名十載阻滄波宇土城邊始得過欲問琴中無限

趣^ラ千山万水自^ラ洋峨

郷音^ラよむや雪^ラを傳^ラく秋の山

中秋熊本賞月^{スラ}

爲^ラ客在南州先^ニ登明月樓玉盤清影滿琪席碧光浮
何處逢^カ良夜斯^ニ生忘倦遊新知如舊識無論^{スレバ}異郷秋
何^カ不^レみ人^ヲ好^ムふ身^ヲ好^ムふ月

○奉寄菊舎尼師^ニ

原田茂世女

孤雲萬里遠遊人到處彈^メ琴逸賞^ラ新心^{ナリ}正毫端知更
妙高風欲^ト挹^ト恐^ト無^レ縁

次原田茂世君見寄韻

遠^ク到^リ東肥逢^フ美人寄^セ來^ル彤管彩雲新薰風吹落紗窓
下得^{タリ}締^ム金蘭一室縁^ヲ

原^ノされ^ル葉^ヲもむ^ルは^レ葉^ノを^レ傳^フる^ル由

奉賀清之嗣高木君之家

何必^ナ羽林郎雄藩多^シ俊良花園新賜^リ余^ニ蘭室舊流^ス芳
盛宴陳珍膳清歌奉^ス玉觴鳳毛元自^ラ美好更^ニ發輝光^ヲ
津^ノふ^ル鳥^ヲを^レさ^スみ^ノち^ニを^レ葉^ノの^ニ電

看寒火^ニ

高々ぬ火やゆりた田面の音きこひ

又

不知火や来白波乃秋明か

又

かきりえも山思ふを筑紫う

初冬も果も浪のきこひ

宿西蓮寺往看寒火惠上人有詩見贈次韻

以呈

無道明光魔社湖煌々寒火點星符不知此物人間

在變作神通如意珠

秋夕静觀亭會辛嶋先生余有故先去先生

有詩見貽次韻奉酬

夜冷露華清秋高月色明桂花風自散楓樹雨初晴

把酒酬新友題詩報舊盟歸來江水上臈々更會情

留別麻生君

新知若兄弟同社登龍門離弦何堪鼓共唱李君恩

同別綾部君

琴中交已久臨別亦何言山水無今古鐘期千載存

叢桂園秋夕次藤崎君見贈韻 君近江人

此地淹留桂樹林潺湲流水入鳴琴坐中更有江湖客為說琵琶仙樂音

琴山小隱迎茶客

此境人間外煮茶引碧雲清風生榻下直欲乘霞氣
小小茶の友待り月思亭

琴山令室とり衣をあまき耐情のあつるを

函歌しつる

山園老菊半將綻忽領縫裁一重緋不厭風霜秋後

蕭歸家却耐作斑衣

急務綿や夏あきあきをみ世の情

奉賀有馬先生七十初度

重陽開宴即仙家片々五雲映菊花羨見紅顏長不老南山歎壽弄流霞

菊月の名りめく酌む古稀乃人

石井君見訪寓居席上有詩既而為余寫選

詩十九首以見寄贈因次前日韻以奉謝

不料孤村夕對君彈古琴清風吹素影明月起商秋

忽見銀鈎字追隨翰墨林客中無可報徒寄白雲心
山中深々筆の林乃意の那

奉留別琴山紫溟二先生長相思二首

江水流積水流歸路悠悠紫溟頭琴樽月下遊惜三
秋數三秋曲裡長吟雙淚浮清風吹散愁

霜滿舟月滿舟別宴山山紅樹秋交歡茲地留鼓琴
遊賦詩遊離曲今宵心更愁河漢星幾流

到筑後久留米次樺嶋儒宗見寄韻

此地携来一古琴神光千里始逢尋東臯遺韻君須
識流水高山不住心

樺君題余所畫之菊見寄即次韻以呈

水墨一枝花投君將適意陶家濁酒杯好更須催醉
高良山々々々前書詩有畧

照るや鳶花々々々々乃月

手折菊三終

